

ルーブリック評価の実践に関する研究

— Excel マクロシートの利用 —

梶田 鈴子 岩田 京子

A Study on the Practice of Rubric Evaluations — Use of Excel Macro Sheets —

Suzuko Kajita Kyoko Iwata

(2019年11月27日受理)

0. はじめに

2012年8月に公表された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」の「求められる学士課程教育の質的転換」の中で「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである。」と述べられている（中央教育審議会、2012、p.9）。

能動的学修の必要性はわかるが、では、どのようにして能動的学修の成果を測っていくのかとの問題がある。成果測定手段の一つとして注目されているのが、ルーブリックである。ルーブリックとは、「『ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具』である。ルーブリックは、ある課題をいくつかの構成要素に分け、その要素ごとに評価基準を満たすレベルについて詳細に説明したもので、さまざまな課題の評価に使うことができる。例えば、レポート、書評、討論への参加、実験レポート、ポートフォリオ、グ

ループワーク、プレゼンテーションなどである。」とされている（Dannelle D. Stevens & Antonia J. Levi, 2014 佐藤監訳, 2013, p.2（訳本でのページ））。

大学教育において、成績評価を明らかに解答がひとつしかない筆記試験のみで行う場合は、ルーブリックのようなツールは必要ではない。しかし、実際には、記述による筆記試験、レポートやプレゼンテーションを課す科目も多くあり、これらの評価を厳密に、そして効率よく行うツールとしてルーブリックは重要な役目を果たしている。

中村学園大学短期大学部キャリア開発学科（以下、本学科）において、専任教員が担当する科目にルーブリック評価を導入したのは2016年である（岸川・梶田, 2019）。ただし、最初に作成したルーブリックは、レポートの採点基準を示した課題ルーブリックと最終の成績評価をどのように行うのかを示した科目ルーブリックが1つになったものであった。例えば、表1を参照されたい。本学科の1年次前学期の必修科目「大学基礎演習」の科目ルーブリックだが、そこにレポート評価用の課題ルーブリックが入っているのがわかる。

科目ルーブリックのなかに課題ルーブリックをいれる是非は別として、表1の課題ルーブリック通りに採点すると各項目の集計にかなりの時間を要する。その煩雑さ故、評価者はレポート全体を読んで「A」や「B」、あるいは少し細かく「A+」や「A-」のように採点をしてしまうことになる。これでは、課題ルーブリックが形骸化しかねない状況であった。

そのような中で、課題ルーブリック通りにレポート評価を実践するために、酒見は2018年度後学期より2年次必修科目「キャリア形成演習Ⅲ」のレポート評価用に課題ルーブリックに対応したExcelマクロ評価

表1 2016年度「大学基礎演習」の科目ルーブリック

【シラバスの到達目標】

1. 建学の精神を理解する。
2. 本学科の教育目標や教育課程の内容を理解する。
3. 学生として基本的な考え方や態度を身に付ける。
4. 授業をよく聴き、メモを取って内容を整理してまとめることができる。
5. レポートを要領よくまとめることができる。
6. 基本的なエチケット・マナーを身に付ける。
7. 読書の習慣を身に付ける。
8. 防犯意識を高め、法令順守の必要性を理解する。

各回のレポート等は、以下の評価基準に基づき採点を行う。基本的に各々100点満点で採点する。また、レポートに対する要望等あれば、各回の授業終了時に明確に説明をすること。

評価項目	S(秀)	A(優)	B(良)	C(可)	評価割合
講義の要旨 35%	担当教員が重要と考える講義のポイントがすべて含まれている。	担当教員が重要と考える講義のポイントが80%以上含まれている。	担当教員が重要と考える講義のポイントが60%以上含まれている。	担当教員が重要と考える講義のポイントが40%以上含まれている。	80%
まとめ方 35%	ポイントに対して具体的内容が十分に記載されており、分かりやすくまとめている。	ポイントに対して具体的内容が記載されており、感想の部分が多数ある。	ポイントに対して具体的内容があまり記載されておらず、分かりにくい。	ポイントの羅列で終わっており、具体的内容がほとんど記載されていない。	
考察(気付き・感想・質問など) 20%	講義内容に関する自分の考えが明確に述べられており、論理的である。量も十分である。	講義内容に関する自分の考えも述べられているが、感想の部分が多数ある。	講義内容に関する感想がほとんどであり、量はやや少ない。	講義内容に関する感想が2、3行述べられている。	
本時のテーマに関連して調べたこと(出典含む) 10%	設定されているテーマの意図を正しく判断し、さまざまな手段を用いて適切な情報を収集している。	設定されているテーマの意図を正しく判断しているが、不正確な情報や不用や情報が含まれている。	一定程度の情報収集はできているが、テーマの意図する内容と十分合致していない。	情報収集の方法に対する知識が不十分であり、必要な情報を十分集めているとはいえない。	
文体 ±α	誤字脱字、句読点、文法に関してエラーがない。	誤字脱字、句読点、文法に関して1、2か所のエラーがある。	誤字脱字、句読点、文法に関して3、4か所のエラーがある。	誤字脱字、句読点、文法に関してエラーが多い。	
その他提出物	提出の目的に即した内容であり、量も十分である。	提出の目的に即した内容ではあるが、量は十分とはいえない。	提出の目的から少し外れた内容であり、量は十分とはいえない。	提出の目的から少し外れた内容であり、量は少ない。	15%
基礎学力テスト	90点以上	70点以上89点以下	50点以上69点以下	30点以上49点以下	
アクティブラーニングなどへの積極的参加態度	参加の意義を十分理解したうえで、積極的に参加する姿勢が見られる。	参加の意義の理解にやや欠けるが、積極的に参加しようという意識がある。	参加の意義の理解にやや欠けるが、他者に迷惑はかけてはならないという意識をもちつつ参加している。	参加の意義の理解が不十分ではあるが、他者に迷惑はかけてはならないという意識をもちつつ参加している。	5%

「キャリア形成演習Ⅲ」 授業レポートの成績評価基準

評価基準	評価割合	模範的	標準	努力を期待	選択	評価
1.授業のポイント	15%	授業のポイントを全て網羅している ○ 15点	授業のポイントに欠けがある ● 13点	授業のポイントが理解できていない ○ 10点	1 2 3 2 15 13 10	13
	15%	自分の言葉で表現している ○ 15点	自分の言葉での表現が少し不足している ● 13点	レジュメを写すなど、自分の言葉での表現ができていない ○ 10点	1 2 3 2 15 13 10	13
2.発展の事後学習	30%	授業のテーマに関連したことを十分に調べている ○ 30点	授業のテーマに関連したことが、調べた事項が少し不足している ○ 26点	授業のテーマからはずれていた、調べた事項が不足している ● 20点	1 2 3 3 30 26 20	20
		授業のポイントおよび発展の事後学習を基に、自己の考えが明白に十分表現できている ○ 30点	授業のポイントおよび発展の事後学習を基に、自己の考えが表現できているが、さらに考えを深める余地がある ● 26点	授業のポイントおよび発展の事後学習を基に、自己の考えが十分ではなく、さらに考える余地が残されている ○ 20点	1 2 3 2 30 26 20	26
4.文章の量	10%	なし ○ 10点	読み手を意識した適切な大きさの丁寧な文字で、レポート用紙が70%以上埋まっている ● 8点	読み手を意識した適切な大きさの丁寧な文字で、レポート用紙が50%~70%程度しか埋まっていない ○ 6点	1 2 3 2 10 8 6	8
			減点 ● 減点なし	減点3点 ○ 減点5点	減点5点 ○ 減点10点	1 2 3 1 0 -3 -5
6.提出日	減点	指定された提出日あるいはそれ以前に提出 ● 減点なし	指定された提出日から1週間以内提出 ○ 減点5点	指定された提出日から1週間以上遅れて提出 ○ 減点10点	1 2 3 1 0 -5 -10	0

開始位置 クリア 入力

計 80

No.	学籍番号	氏名	評価点	1a	1b	2	3	4	5	6
1	17H101	●● ●●●	80	13	13	20	26	8	0	0
2	17H102	●● ●●								
3	17H103	●● ●●								
4	17H104	●● ●●								

図1 2018年度「キャリア形成演習Ⅲ」レポート用評価シート

キャリア形成演習Ⅰ レポート採点用

評価指標	S(秀)	A(優)	B(良)	C(可)	D(不可)	E(失格)	評価
講義の要旨	担当教員が重要と考える講義のポイントがすべて含まれている。また、ポイントに対して具体的内容が十分に記載されており、分かりやすくまとめている。	担当教員が重要と考える講義のポイントが80%以上含まれている。また、ポイントに対して具体的内容が記載されており、分かりやすくまとめている。	担当教員が重要と考える講義のポイントが70%以上含まれている。また、ポイントに対して具体的内容があまり記載されておらず、分かりにくい。	担当教員が重要と考える講義のポイントが60%以上含まれている。また、ポイントの羅列で終わっており、具体的内容がほとんど記載されていない。	努力を要する	Dにも該当しない	1 2 3... 40.8 6 49 48 46
50%	○+ ○ ○-	○+ ○ ●-	○+ ○ ○-	○+ ○ ○-	○+ ○ ○-	○	(省略)
考察(気付き・感想・質問など)	講義内容に関する自分の考えが明確に述べられており、論理的である。量も十分である。	講義内容に関する自分の考えが明確に述べられているが、論理性に欠ける。量は十分である。	講義内容に関する自分の考えも述べられているが、感想の部分が多い。量はある。	講義内容に関する感想がほとんどであり、量はやや少ない。	努力を要する	Dにも該当しない	1 2 3... 15 5 19 18 17
20%	○+ ○	○+ ○	●+ ○	○+ ○	○+ ○	○	1 2 3... 16 4 19 18 17
本時のテーマに関連して調べたこと(出典含む)	設定されているテーマの意図を正しく判断し、さまざまな手段を用いて適切な情報を収集し、発展性がある。	設定されているテーマの意図を正しく判断し、さまざまな手段を用いて適切な情報を十分に収集している。	設定されているテーマの意図を正しく判断し、さまざまな手段を用いて適切な情報をある程度収集している。	設定されているテーマの意図を正しく判断し、テーマに沿った情報を収集している。	努力を要する	Dにも該当しない	1 2 3... 8 2 9 8 7
20%	○+ ○	○+ ●	○+ ○	○+ ○	○+ ○	○	1 2 3... 0 1 0 -10 -10
文体・体裁等	誤字脱字、句読点、文法、体裁に関してエラーがない。また、丁寧で見やすい字で書かれている。	誤字脱字、句読点、文法、体裁に関してエラーがない。また、丁寧で見やすい字で書かれている。	誤字脱字、句読点、文法、体裁に関して1、2か所のエラーがある。また、丁寧な字で書かれている。	誤字脱字、句読点、文法、体裁に関して3、4か所のエラーがある。また、丁寧な字で書かれている。	努力を要する	Dにも該当しない	1 2 3... 8 2 9 8 7
10%	○+	●	○	○	○	○	1 2 3... 0 1 0 -10 -10
その他	期限内提出	遅刻	用紙	遅刻+用紙			1 2 3... 0 1 0 -10 -10
	●	○	○	○			

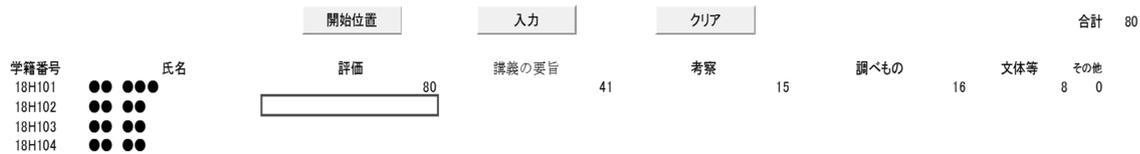


図2 2018年度「キャリア形成演習Ⅰ」レポート用評価シート

シート(以下、評価シート、図1)を開発した(酒見, 2019)。その後、1年次必修科目「キャリア形成演習Ⅰ」でも、同様の評価シートの利用を開始した(図2)。「キャリア形成演習Ⅲ」の評価シートと比較すると、「キャリア形成演習Ⅰ」の評価シートは細かな評価になっているが、これは課題ループリックが異なるためである。

本学科ではレポートやプレゼンテーションの評価に課題ループリックを使用した評価シートの開発・実践に試行錯誤してきた。本稿では初年次教育に位置付けされている「大学基礎演習」(1年次前学期、必修科目、担当教員8名によるオムニバス授業)における課題ループリックに基づく評価シートの実践と成果、課題について報告する。

1. 2019年度「大学基礎演習」で使用した評価シートの種類

本学科では、2019年度前学期の「大学基礎演習」(以下、本科目)において、12種類におよぶ評価シートの改修あるいは新規作成により、レポートやプレゼンテーションなどの評価を行った。

科目ループリックを表2に示している。2017年度に

カリキュラムの改定を行った結果、SPIに関する5分間テストが「ビジネス研究基礎」(1年次前学期、必修科目)に移行したため、科目ループリックを変更した。また、科目ループリックに記載されていないプレゼンテーションの課題ループリックや通常のレポートとは内容が異なるレポートの課題ループリックについては、可能な限り事前に学生に提示するようにした。

なお、本科目では入学前の課題(コラム帳、スクラップ帳、入学前キャリアデザインシート)も採点して成績評価に反映させていることから、2019年度本科目で使用した評価シートは以下(1)~(12)の12種類である。

- (1) コラム帳(図3)
- (2) スクラップ帳
- (3) 入学前キャリアデザインシート
- (4) 社会性教育のレポート
- (5) 通常のレポート(図4)
- (6) 第3回「レポート・論文の書き方」のレポート(図5)
- (7) 第10回クラス別プレゼンテーション
- (8) 卒業した高等学校の恩師宛の葉書
- (9) 第13回「葉書の書き方」のレポート
- (10) 第14回全体(クラス代表)プレゼンテーション(図6)

表2 2019年度「大学基礎演習」の科目ルーブリック

各回のレポート等は、以下の評価基準に基づき採点を行う。基本的に各々100点満点で採点する。また、レポートに対する要望等あれば、各回の授業終了時に明確に説明すること。

シラバス記載の到達目標	評価項目	S(秀)	A(優)	B(良)	C(可)	評価割合
1. 建学の精神を理解する。 2. 本学科の教育目標や教育課程の内容を理解する。 3. 学生として基本的な考え方や態度を身に付ける。 4. 授業をよく聴き、メモを取って内容を整理してまとめることができる。 5. レポートを要領よくまとめることができる。 6. 基本的なエチケット・マナーを身に付ける。 7. 読書の習慣を身に付ける。 8. 防犯意識を高め、法令順守の必要性を理解する。	講義の要旨 35%	担当教員が重要と考える講義のポイントがすべて含まれている。	担当教員が重要と考える講義のポイントが80%以上含まれている。	担当教員が重要と考える講義のポイントが60%以上含まれている。	担当教員が重要と考える講義のポイントが40%以上含まれている。	60%
	まとめ方 35%	ポイントに対して具体的内容が十分に記載されており、分かりやすくまとめている。	ポイントに対して具体的内容が記載されており、分かりやすくまとめている。	ポイントに対して具体的内容があまり記載されておらず、分かりにくい。	ポイントの羅列で終わっており、具体的内容がほとんど記載されていない。	
	考察(気持ち・感想・質問など) 20%	講義内容に関する自分の考えが明確に述べられており、論理的である。量も十分である。	講義内容に関する自分の考えも述べられているが、感想の部分が多い。量はある。	講義内容に関する感想がほとんどであり、量はやや少ない。	講義内容に関する感想が2、3行述べられている。	
	本時のテーマに関連して調べたこと(出典含む) 10%	設定されているテーマの意図を正しく判断し、さまざまな手段を用いて適切な情報を収集している。	設定されているテーマの意図を正しく判断しているが、不正確な情報や不用意な情報が含まれている。	一定程度の情報収集はできているが、テーマの意図する内容と十分合致していない。	情報収集の方法に対する知識が不十分であり、必要な情報を十分集めていない。	
	文体 ±α	誤字脱字、句読点、文法に関してエラーがない。	誤字脱字、句読点、文法に関して1、2か所のエラーがある。	誤字脱字、句読点、文法に関して3、4か所のエラーがある。	誤字脱字、句読点、文法に関してエラーが多い。	
	その他提出物	提出の目的に即した内容であり、量は十分である。	提出の目的に即した内容ではあるが、量は十分とはいえない。	提出の目的から少し外れた内容であり、量は十分とはいえない。	提出の目的から少し外れた内容であり、量は少ない。	
期末試験(レポート作成)	90点以上	80点以上89点以下	70点以上79点以下	60点以上69点以下	30%	
アクティブラーニングなどへの積極的参加態度	参加の意義を十分理解したうえで、積極的に参加する姿勢が見られる。	参加の意義の理解にやや欠けるが、積極的に参加しようという意識がある。	参加の意義の理解にやや欠けるが、他者に迷惑はかけてはならないという意識をもちつつ参加している。	参加の意義の理解が不十分ではあるが、他者に迷惑はかけてはならないという意識をもちつつ参加している。	10%	

コラム帳の採点表

- ①新聞のコラム記事が最後まで書き写されているか
- ②新聞名とコラム名が書かれているか(全記事が同コラムの場合は先頭にその旨の記載があればよい)
- ③コラム記事の日付が書かれているか
- ④わからない漢字の読みや意味を調べて書いているか
- ⑤重要な部分や本質的な部分にマーカーを引いたり・困ったりしているか

各記事に対する①～⑤の該当項目数→			5項目		4項目		3項目		2項目		1項目	
開始	クリア	入力	+1	-1	+1	-1	+1	-1	+1	-1	+1	-1
		評価点=	61	2	3	10	4	1				
19H101	●●●●	93	15	3	2	0	0					
19H102	●●●●	61	2	3	10	4	1					
19H103	●●●●											
19H104	●●●●											
19H105	●●●●											
19H106	●●●●											
19H107	●●●●											
19H108	●●●●											
19H109	●●●●											
19H110	●●●●											
19H111	●●●●											
19H112	●●●●											
19H113	●●●●											
19H114	●●●●											
19H115	●●●●											
19H116	●●●●											
19H117	●●●●											
19H118	●●●●											

図3 コラム帳用評価シート

大学基礎演習 レポート採点用



図4 通常レポート用評価シート

大学基礎演習 論文・レポートの書き方 レポート採点用



図5 「論文・レポートの書き方」レポート用評価シート

- (11) 第15回最終レポート
- (12) 大学基礎演習キャリアデザインシート

なお、スラップ帳の評価シートは、評価項目は異なるものの、基本的にはコラム帳の評価シート(図3)の形式と同じである。

2. 評価シートの使用方法

評価シートの使用方法について、コラム帳(図3)と通常のレポートの評価(図4)を例にとり説明する。いずれもExcelのマクロを使用しているため、評価シートを開いたときに「コンテンツを有効にする」というボタンがリボンの下に表示される可能性があるが、その場合

大学基礎演習 全体プレゼンテーション採点用

評価指標	S(秀)	A(優)	B(良)	C(可)	評価
パワーポイント	パワーポイントが非常に分かりやすく、工夫が見られるなど、魅力的である。	パワーポイント分かりやすい。しかし内容、図(グラフ)、文字数が多い等、若干の改善が必要である。	パワーポイントは分かりやすいが、内容、図(グラフ)、文字数が多い等、数箇所改善が必要である。	パワーポイントは作成されているが、プレゼン内容の理解に役立っていない。大幅な改善が必要である。	1 2 3 4 5 6 7 8 14 2 15 14 13 12 11 10 9 8
発表内容	事実や事例が詳細かつ正確である。事実や事例が分析、結論に分かり易く結びつけられており、発展的な意見が述べられている。	事実や事例が詳細かつ正確である。事実や事例が分析、結論に結びつけられているが説得力に欠ける。	事実や事例の詳細に誤りや抜けがある。事実や事例が分析、結論に結びついていないが努力が見られる。	事実や事例の詳細が無い、または不正確である。事実や事例が分析、結論に結びついていない。	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 37.33 2 39 37 36 35 33 32 30 28 27 27 25 24
発表構成	導入、展開、結論の順番にできている。つながりもスムーズである。それぞれの内容が良くまとまっている。	導入、展開、結論の順番にできている。それぞれの内容がまとまっているが冗長である。	導入、展開、結論の順番に一応なっているが、明確でない。まとまりはないが努力が見られる。	導入、展開、結論の順番になっていない。まとまりがない。	1 2 3 4 5 6 7 8 14 2 15 14 13 12 11 10 9 8
発表技術	適度な声量・話し方で非常に聞き取りやすい。適度なジェスチャー、アイコンタクトで表情豊かでユーモアも交えて魅力的である。	声量・話し方は聞き取りやすい。ジェスチャー、アイコンタクトを要所で使い、飽きさせない。	聞き取ることはできるが、単調であったり、聞きづらい等の欠点がある。ジェスチャー、アイコンタクトを交える努力が見られる。	声が小さい、早口、不明瞭な話し方で聞き取りにくい。ジェスチャー、アイコンタクトが不十分で魅力に乏しい。	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 27 3 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18

	開始位置	入力	クリア	合計
発表順	クラス名 - 班名	評価	パワーポイント	発表内容
1	2クラス - C班	82	12	33 11 25
2	7クラス - B班	93	14	37 14 27
3	1クラス - D班			
4	5クラス - D班			
5	6クラス - A班			
6	3クラス - A班			
7	4クラス - A班			
8	8クラス - C班			

図6 全体プレゼンテーション用評価シート

はそのボタンをクリックして有効化する必要がある。

まず、コラム帳の評価シートの使用方法であるが、次の手順となる。

手順1 評価点を入力したい学生氏名の右側のセルを選択し、「開始」ボタンをクリックする。

手順2 1日分のコラムに対して、①～⑤の評価項目にいくつ該当しているかによって「5項目」から「1項目」の「+1」ボタンをクリックする。評価点欄の該当する項目の数値が1大きくなる。ミスをした場合は該当する項目の「-1」ボタンをクリックして1減らし、正しい項目の「+1」ボタンをクリックする。

手順3 手順2を提出されているコラム数分繰り返し、「入力」ボタンをクリックする。

手順4 評価点と各項目がいくつあるかが学生氏名の右側に表示され、次の学生氏名の右側に入力位置が移動する。

手順5 「クリア」ボタンをクリックし、評価欄の各項目の数値を「0」にする。手順2に戻る。

なお、評価中の学生の評価点を最初から付け直すときは「クリア」ボタンをクリックして評価点欄の各項目の数値を「0」にし、手順2に戻る。

次に、通常レポートの評価シートの使用方法であるが、以下の手順となる。

手順1 評価点を入力したい学生氏名の右側のセルを選択し、「開始位置」ボタンをクリックする。

手順2 評価対象のレポートに対して、「講義の要旨」「まとめ方」「考察」「本時のテーマに関連して調べたこと(以下、調べもの)」「文体・体裁等」「その他」の該当する評価のラジオボタンをクリックする。右側の評価の位置に各評価点と合計が表示される。評価の修正も、該当するラジオボタンをクリックし直すだけで良い。評価が終わったら「入力」ボタンをクリックする。

手順3 該当学生の右側のセルに、「評価」「講義の要旨」等の順に並べて点数が表示され、入力位置が次の学生氏名の右側に移動する。

手順4 次の学生の評価をするときは、「クリア」ボタンで前の学生の評価を消しても良いし、該当するラジオボタンをクリックし直しても良い。手順2に戻る。

なお、レポートを提出していない学生については、該当学生の氏名の右側にアクティブセルが移動したときに、「クリア」ボタン、「入力」ボタンの順にクリックする。または、アクティブセルを次の学生氏名の右側に移動させて手順1に戻る。

実際に使ってみると、平易に操作が可能で、レポートの評価に集中することができる。

3. 成果と課題

評価シート導入前のレポート評価には厳密さに欠ける

(単位:点)

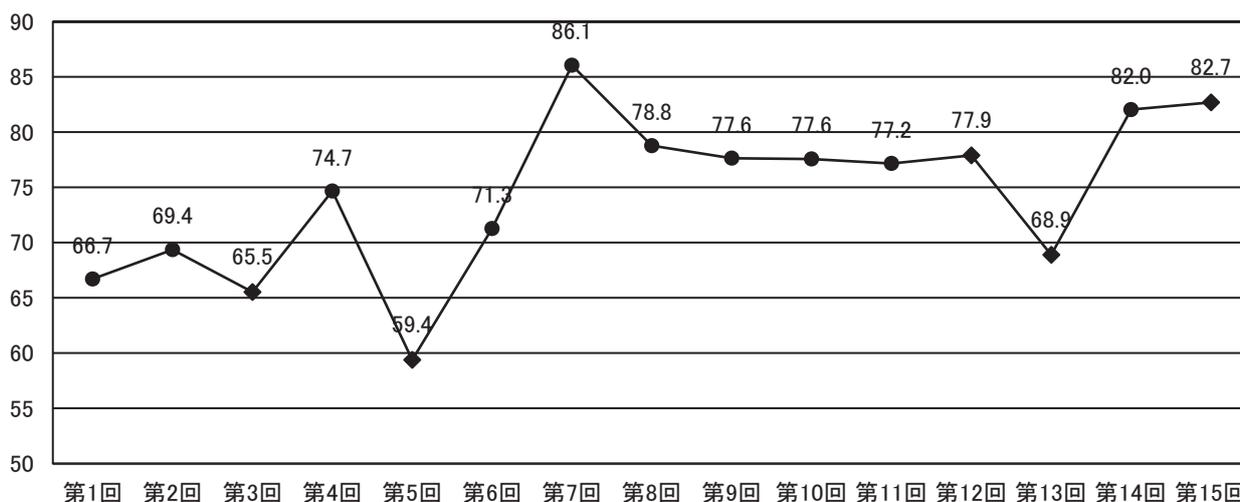


図7 授業回ごとのレポートの平均値の推移

ことが課題であったが、評価シート導入後は以前よりは厳密に、そして効率的に評価を行うことができるようになった。また、各評価指標の値が残せることにも、メリットがある。それは、どの評価指標が良くできていて、どの評価指標が悪いのか、等の分析も可能になったことである。

本科目のレポートは、基本的に、実施回の次の回で回収、評価点を記入して、さらに次の回で返却している。評価点を記入したレポートの返却により、評価点に変化は見られるのだろうか。各授業回におけるレポート評価の平均点の推移を図7に示す。図4の通常のレポート評価と異なる課題ルーブリックに基づき評価を行ったのは、図7においてマーカーが◆で示された第3回、第5回、第12回、第13回、第15回である。グラフは、異なる評価シートを用いた回を除くと、第7回以外は順調に伸びるか現状を維持しているように思われる。

そこで、第1回と第4回、第1回と第14回の全体の評価及び各評価指標の平均値に差が見られるのか、SPSSを使ってt検定を行った。その際、該当する授業回のいずれか、または両方で欠席やレポートを提出しなかった学生は除外した。また、検定を行うにあたって、評価指標の「講義の要旨」「まとめ方」「考察」「調べもの」「文体・体裁等」と全体の「評価」について調べるために、「その他」でレポート提出が遅延した学生は遅延しなかった点数に戻した。

まず、同じ評価者(授業担当教員)Aが同じ評価シートを使って採点した第1回と第4回のレポート評価について分析した。分析の対象となった学生は129名である。評価指標ごとの基本統計量は表3、対応するデータの平均値の差の検定の結果が表4である。

表3 第1回と第4回のレポート評価の統計量

評価指標	レポート回	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
評価	第1回	66.946	9.765	0.860
	第4回	74.678	7.538	0.664
講義の要旨	第1回	23.707	3.478	0.306
	第4回	26.015	2.881	0.254
まとめ方	第1回	25.915	3.025	0.266
	第4回	23.200	3.450	0.304
考察	第1回	13.372	2.288	0.201
	第4回	14.969	1.363	0.120
調べもの	第1回	5.899	2.402	0.212
	第4回	6.996	1.218	0.107
文体・体裁等	第1回	0.767	0.644	0.057
	第4回	0.783	0.530	0.047

表4 第1回と第4回の評価指標の対応のあるデータの平均値の差の検定結果

評価指標 (第4回-第1回)	対応サンプルの差				t	有意確率 (両側)	
	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	差の95%信頼区間			
				下限			上限
評価	7.733	8.965	0.789	6.171	9.294	9.796	0.000
講義の要旨	2.308	3.486	0.307	1.701	2.915	7.521	0.000
まとめ方	2.715	3.542	0.312	2.098	3.332	8.706	0.000
考察	1.597	1.994	0.176	1.249	1.944	9.095	0.000
調べもの	1.097	2.248	0.198	0.705	1.489	5.541	0.000
文体・体裁等	0.016	0.829	0.073	-0.129	0.160	0.212	0.832

第1回のレポートは第3回には返却されており、第4回のレポートを作成する際は第1回のレポートの返却は終わっていることになる。その成果か、「文体・体裁等」を除き、各評価指標と、それらの合計点としての評価も、第1回より第4回の方の平均値が高いことが分かった ($p < 0.001$)。

また、第1回と第14回のレポート評価についても比較してみた。ただし、それぞれの回でレポートの評価を行った評価者が異なる上に、第14回については評価者Bと評価者Cの2名で全受講生を半分に分けて評価を行った。分析の対象となった学生は123名である。評価指標ごとの基本統計量は表5、対応するデータの平均値の差の検定の結果が表6である。

表5 第1回と第14回のレポート評価の統計量

評価指標	レポート回	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
評価	第1回	66.770	9.954	0.898
	第14回	82.722	9.188	0.828
講義の要旨	第1回	23.715	3.513	0.317
	第14回	29.105	4.916	0.443
まとめ方	第1回	23.156	3.498	0.315
	第14回	30.044	3.271	0.295
考察	第1回	13.333	2.311	0.208
	第14回	15.813	2.151	0.194
調べもの	第1回	5.833	2.506	0.226
	第14回	7.411	1.439	0.130
文体・体裁等	第1回	0.732	0.702	0.063
	第14回	0.350	0.932	0.084

こちらは、全ての評価指標と、それらの合計点としての評価点が、第1回より第14回の方の平均値が高いことが分かった ($p < 0.001$)。しかし、第14回の評価において、「講義の要旨」「考察」「調べもの」と全体の評価では評価者Bと評価者Cの評価の平均値に有意差は認められなかったが、「まとめ方」($p < 0.05$)と「文体・体裁等」($p < 0.001$)において評価者Bと評価者Cの評価の平均値に有意差が認められた。

なお、「文体・体裁等」を除く各評価指標について、評価指標ごとの満点を100とした場合の評価の伸びの平均値を表7に示す。

表7 各評価指標の伸び (各評価指標を100として)

評価指標	第1回→第4回	第1回→第14回
講義の要旨	6.595	15.670
まとめ方	7.757	19.816
考察	7.985	12.398
調べもの	10.969	15.000

第1回と第4回の比較では、「調べもの」が一番伸びており、次に「考察」「まとめ方」「講義の要旨」の順であった。第1回と第14回の比較では、「まとめ方」が一番伸びており、次に「講義の要旨」「調べもの」「考察」の順であった。ふたつの比較を通して、確実にレポート評価は良くなっていることが分かった。

一方で、課題もある。それは、評価者ごとの評価基準の統一が難しいことである。例えば、前述したように第14回は評価を2名で行ったことにより、一部の評価指標で平均値に有意差が認められる結果となった。また、授業担当教員が受け持ちのクラス単位で評価を行うと、評価にばらつきが見られる。実際に、クラス単位で評価(1名のみ2クラス分評価)を行った第10回について、評価者ごとに差がないか一元配置分散分析を試みた。しかし、評価者間の評価の分散が等しくなかったため、Kruskal-Wallisの検定を行った。その結果が図8で

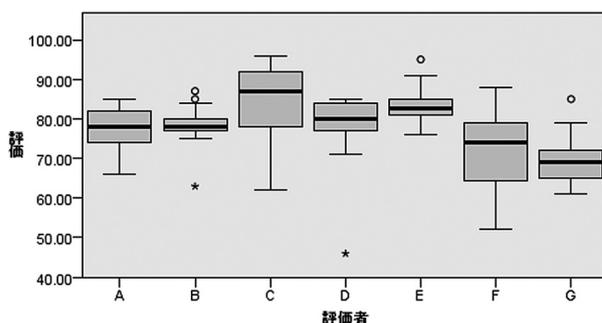


図8 Kruskal-Wallisの検定結果

表6 第1回と第14回の評価指標の対応のあるデータの平均値の差の検定結果

評価指標 (第14回-第1回)	対応サンプルの差					t	有意確率 (両側)
	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	差の95%信頼区間			
				下限	上限		
評価	15.953	12.461	1.124	13.728	18.177	14.198	.000
講義の要旨	5.390	5.925	0.534	4.332	6.447	10.089	.000
まとめ方	6.888	4.386	0.396	6.105	7.671	17.416	.000
考察	2.480	2.732	0.246	1.992	2.967	10.066	.000
調べもの	1.577	2.482	0.224	1.134	2.020	7.048	.000
文体・体裁等	-0.382	1.060	0.096	-0.571	-0.193	-3.999	.000

ある。図からも明らかのように、評価者により評価に差があることが分かる ($p < 0.001$)。

また、各評価者間で評価に有意差があるのかを見てみると、次のように複数の評価者間で有意差が認められる結果となった。

評価者 A — 評価者 G ($p < 0.05$)

評価者 C — 評価者 F ($p < 0.01$)

評価者 C — 評価者 G ($p < 0.001$)

評価者 D — 評価者 G ($p < 0.01$)

評価者 E — 評価者 F ($p < 0.05$)

評価者 E — 評価者 G ($p < 0.001$)

評価者 7 名のうち評価者 B のみ、他の評価者との間に差は認められなかった。こうした評価者によるばらつきは、評価者の課題ループリックに対する理解不足や解釈の相違が原因であると考えられる。今後、課題ループリックによる評価に厳密性をもたせるには、課題ループリック自体の見直しと、評価を左右する評価者の心理的側面はないかの研究も行うべきであろう。

なお、本科目の最終の成績評価を行うにあたっては、第 10 回のレポート評価のような評価者間の差もあることから、全クラス統一して評価をした場合とクラス単位で評価をした場合に分けて評価を集計し、その結果を踏まえてクラス間での不平等が極力少なくなるよう調整を行っている。

4. まとめ

本稿では、Excel を使用した評価シートを提示した。実際には、Moodle を使った同じような取組みもある (上木, 2019)。しかし、「誰でも気軽に使い易く」と考えると、Moodle より Excel を使用した評価シートの方が適しているように思われる。

本稿では、評価指標や評価割合の設定など、科目あるいは課題のループリック評価自体の作成方法ではなく、作成した課題ループリックをどのように実践していくかということに主眼をおいて考察した。Excel や Moodle に限らず、ここで述べたような評価シートを使用すれば、課題ループリックに沿ってより厳密に、そして効率的に評価を行うことが可能となる。また、評価の結果をタイミングよく学生にフィードバックすることにより、学生はフィードバックされた結果を活用してより評価の高いレポートを作成することも可能となる。さらに、評価指標ごとに評価点が記録され、その変化を追うことが可能であることから、教員側からは授業の改善に役立てることができる。

学修成果を把握し、可視化を図るものとして、課題ループリックは十分に立つツールであるが、今後の課

題も残る。現在、レポートの評価は基本的に総合評価点のみを記載して学生に返却しているが、例えば評価指標ごとに評価を記載すると評価はもっと上がるのだろうか。今後は、学修成果を高める返却・フィードバックの方法の検討も必要であろう。また、現在使用している課題ループリックの妥当性や複数評価者でも評価基準を統一できる方法など、研究を重ねていきたい。

【引用・参考文献】

- 中央教育審議会 (2012) 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)』
- Dannelle D. Stevens & Antonia J. Levi (2013), Introduction to Rubrics : An Assessment Tool to Save Grading Time, Convey Effective Feedback, and Promote Student Learning, Second Edition, Stylus Publishing, LLC (佐藤浩章監訳・井上敏憲・俣野秀典訳 (2014) 『大学教員のためのループリック評価入門』多摩川大学出版)
- 岸川公紀・梶田鈴子 (2019) 「ループリックの作成方法と活用に関する一考察—学生アンケートを踏まえながら—」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第 51 号 199-208
- 酒見康廣 (2019) 「Excel マクロを用いたループリック評価入力の効果」『中村学園大学発達支援センター研究紀要』第 10 号 55-65
- 上木佐季子 (2019) 「Moodle 課題モジュールの活用—ループリックを利用した課題の採点—」『富山大学総合情報基盤センター広報』第 16 号 11-15